



## 「検疫」の生命力

サッカーやバレー、スケート、テニス、ゴルフ、ラグビーなど、スポーツは世界が舞台となる。かつては、ニュースで異国の地に入る映像を見ると、何の脈絡もなく「検疫」が頭に浮かんだ。今や新型コロナウイルスで、「検疫」が語られるが、そもそも入国禁止や海外渡航自粛となると、検疫も不要。

国際空港では検疫があるが、以前の日本では、一定地域を除き、黄色い用紙の申告書を出していたが今はない。

当時の係員は、次から次に通る客から申告書を受け取り、注意書きを渡すのに必死であった。2003年はSARS、2004年は鳥インフルエンザで大変だった。大阪・神戸・京都を観光した台湾の医師がSARSにかかっていたと判明し、大騒ぎになった。

この「検疫」の英語がQuarantine（クオランティン）

なかなか覚えられなかった。

というか、その綴りを見た時に「なんじゃこりゃ」という印象だった。

しかし、沿革を知れば納得。

その昔、14世紀にペストが流行った。汚染された土地から来た船が到着すると汚染が伝わるということで騒然となり、そこで一定期間隔離することになった。

時は1374年、場所はイタリアのベネチア。

港湾検疫として「40日隔離」が始まったという。

隔離と言っても施設があるわけではなく、到着した船の中での隔離。

つまりは40日間の足止めで、病人が出なければOK、出れば追い返す。

「40日」は、イタリア語でQuarantina（クオランティーナ）と言う。

これが検疫の語源であり、梶田昭著「医学の歴史」（講談社学術文庫）で知った。

綴りが変だったのも、意味が分かりにくかったのも無理はない。

しかし、分かれば二度と忘れない。

40日隔離を意味した実質的検疫。

片や、紙をやり取りするだけの時代もあった日本の検疫。

衛生面や社会条件は大きく変わったのに、言葉はこれに左右されない。言葉の威力に驚く。

（山下輝年記）